

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]



洋服が持つ無限の可能性に魅せられて

メンズドレス業界No.1インフルエンサーの原点

●株式会社ビームス BEAMS F ディレクター
西口 修平さん 一経済学部2001年卒業

日本を代表するセレクトショップ「BEAMS(ビームス)」。洋服はもちろん、ポップカルチャーから伝統工芸品まで扱う、人気の老舗セレクトショップだ。この目利き集団のなかでも、西口さんはメンズドレス業界において抜群の知名度があり、そのファッションセンスと発信力で注目を集めている。

◆インスタフォロワー数12万人超

東京・原宿の「BEAMS」本社。受付フロアにあるモニター画面には、スマートなスーツ姿でインタビューに答える西口さんの映像が流れていた。西口さんのインスタグラムのフォロワー数は12万人を超え、私服のコーディネートを紹介したスタイルブック『Nishiguchi's Closet』(学研プラス)も刊行されるほど、インフルエンサー(@shuhe_i_nishiguchi)として高い人気を誇っている。

現在、BEAMSには、カジュアルなラインからスーツなどの重衣料まで、さまざまなターゲット向けに約30のレーベルがある。なかでも西口さんがディレクターを務める「BEAMS F」は、大人の男性を対象に洗練された高級感あふれる洋服を取りそろえている。「僕の仕事は、イタリアを中心にイギリスやフランスを訪れて、現地でバイイングをしたり、オリジナル商品の企画開発をしたり、全体の商品構成を考えたり、BEAMS Fのすべてを創り上げていくこと。もう8年くらい担当しています」

180cmの長身で、圧倒的な存在感を放つ西口さん。やさしい笑顔に、時折大阪弁がこぼれる。やわらかな空気をまとった人だ。

◆学生時代に天職を知る

西口さんの半生をひもとくと、すべてが洋服につながっていく。洋服に興味を持ったのは、小学校高学年の頃。当時流行していたリーバイスのジーンズ、ラルフローレンのポロシャツといったアメリカン・カジュアルに惹かれた。「でも、なかなか手が出なくて。チラシを見て地元・豊中市や箕面市のセール情報をつかんで、お小遣いで少しずつ買い集めていました」

高校生の頃、テレビを見ていると、お笑いコンビ・ダウンタウンの浜田雅功さんが身に付けていたデニムに目を奪われた。「アメ



▲『Nishiguchi's Closet』(学研プラス2019年)

リカの古着とか、リーバイスのデッドストックとか、高価で取引されるヴィンテージものに注目が集まっていたのが90年代初頭の頃でした。当時の僕の格好は……思い出すと恥ずかしいですね。でも懐かしいです」

関西大学を志望したのも、おしゃれな学風だと感じていたから。兄も関大生で元々親しみを覚えていたが、千里山キャンパスの周辺に人気のセレクトショップがあったのも魅力的だった。

学生時代の思い出も洋服に彩られている。キャンパスでお気に入りの場所は、購買部のスニーカー屋。他店では売り切れたものが、手に入ることもあった穴場だったとか。卒業後も親交のある恩師、北原聡教授との出会いも、洋服の話題から。「授業の後、思わず先生に話しかけたんです。『素敵なスーツですね』って。仕立ての良さが一目で分かるスーツでした。それから、北原先生とよくお話をするようになりました。僕が結婚した時には素敵な時計をいただいたり。いい加減な学生でしたが、関大での学生生活は思い出深いです」

「洋服に関わる仕事で生きていく」と決意したのも大学生の頃。アルバイトも行きつけの古着屋を皮切りに、デザイナーズブランドのセレクトショップ、そして4年次生になると大阪・梅田のHEP FIVEにあるBEAMSで働き始めた。給料はほぼすべて洋服につき込んだ。スーツで通学する、ちょっと変わった学生だった。だが、「いいモノ」を見極める確かな目を培ったのも大学生の時だった。

◆転機となったイタリア出張

2002年、希望がなくなってBEAMSに入社。大阪、神戸の店舗に約10年勤めた。それでも、駆け出し時代はもがいた。「2〜3年目までは楽しかったけれど、結婚して家族ができて、子どもの将来を考えると、だんだん悩むようになりました。洋服は大好きだけど、しっかりお金を稼がないといけないし、かと言って、そのために将来店長になってマネジメントを任せられるのも違うような気がして。洋服屋を辞めることも頭をよぎりました。洋服屋が洋服を買うことを我慢したり、洋服に妥協したらプロとして終わりだとも思った。理想と現実が交錯していました」

しかし、転機は突然訪れる。

約10年前。神戸の店舗に勤務していた時、社内の勉強会に積極的に参加して、メンズファッションを統括する現在の上司にアドバイスを求めている。すると、イタリア最大のメンズファッションの展示会「PITTI UOMO」への出張を命じられたのだ。誰もが憧れる展示会。関西の店員が指名されることは異例だった。本場の空



気を肌で感じながら、自分の目で、洋服や着こなしを見て回った。「不安でした。言葉も通じないし、正直、最高に楽しく、最高につらい出張でした。でも、実際に現場で見聞きし、自分に自信を持つこともありました。自ら努力を重ねていくと、道が開け、チャンスが巡ってくる。もっともとのめり込んで、この仕事を通して成長したいと思いました」

帰国後、現地で見えた商品展示の工夫や自分なりのコーディネート分析などを交えた詳細な出張レポートを作成。社内で配って、勉強会を主催した。

東京のバイヤーアシスタントという異動内示が出たのは、その直後だった。

◆本当にいいモノを後世に残したい

洋服が好き——。西口さんの言葉の端々から、そんな思いが伝わってくる。「僕は洋服に一目惚れしちゃうんですよ。『カッコいいなあ』『着てみたいなあ』。この感覚は、今も昔も変わりませんね。仕事はとても充実しています。アイデアを出しながら海外で一つのものを作り込んでいくのも、工場で職人の巧みな仕事を見るのも好きです」

休日でも洋服屋に出かける。それが息抜きにもなる。オンもオフも洋服のことが頭から離れない。量販店、古着屋、セレクトショップ、女性ものの洋服屋もまわる。「男性のクラシックな洋服は目に見える変化がわりと少ないのですが、女性の洋服は変化が大きく、色もシルエットも着こなしもさまざま。それを、タイミングを見て男性の服作りや着こなしに落とし込んで、提案することもあります。洋服を見ていると、アイデアが突然降ってくることもある。本当に好きだからこそ探究し続けられる。そしてその先に必ず見えてくるものがあるのだと信じています」

BEAMSの“顔”として、年々活動の幅が広がり、責任も増している。「今後は本当にいいモノを後世に残すための活動に、より一層力を入れたいと思っています。例えば、唯一無二の技術を持ったファクトリーも、伝承する人がいないとついでにしまう。一社員の枠を超えて、ライフワークとして取り組むべきことだと思っています」

西口 修平—にしぐち しゅうへい
■1977年、大阪府生まれ。2001年関西大学経済学部卒。2002年、株式会社BEAMS入社。関西での販売職を経験した後、東京でバイヤーに抜擢され、現在に至る。メンズドレスクロージングの講演会や他ブランドのディレクションなど、マルチに活動の場を広げている。

